

## 「3. 1 1後」と子どもたち

— 「3. 1 1」の新聞報道を手がかりに—

時津 啓

本稿の目的は、「3.11」をめぐる報道において「子ども」がどのように描かれているのかを明らかにすることにある。そして、「3.11」の記録において「子ども」の描写が果たした役割を解明する。「3.11」以降、子どもは三つの観点で描き出されている。第一に、「出産」であり、第二に、「放射能との関係」であり、第三に「希望」である。本稿はこれらを手がかりに、メディアの有する子ども観を明らかにし、メディアが、子どもを「3.11」と対照的に描くことで、二項対立を構築していることを解明した。そして、この二項対立の構造が「3.11」の複雑性を看過させていることを示し、一元的子ども観の危険性を明示した。

### はじめに

本稿の目的は、2011年3月11日の東日本大震災（以下、「3.11」）をめぐる報道において「子ども」がどのように描かれているのかを明らかにすることにある。そして、「震災後」において「子ども」の描写が果たした役割を解明する。

教育学の領域では日本教育学会が特別課題研究として「大震災と教育」を設定し、三つの課題を研究している。第一に、園や学校は子どもをどう守ったか（守れなかったか）、その確実な記録を作成する。第二に、被災の中で子ども・若者たち、そこでの苦難と支援のあり方を追究する。第三に、大震災の被災経験が日本の教育に提起する基本的・理論的課題点を明示し追求する[久富 2012:367]。強引ではあるが、第二に該当する研究として山住勝弘の研究を上げることができる。山住は、自らの阪神淡路大震災の被災経験を手がかりに、震災学習の重要性を説く。子どもは、学校外に存在する多様な他者や社会的世界とオープンに出会う必要がある。外の世界にある他なるものやさまざまな他者に対して共感的な関心を抱いて関わることで、連帯的な行

為を発達させることができると言うのである[山住 2012:375]。

さらに第三に該当するものとして小笠原道雄の研究を上げることができる。小笠原は、ドイツの教育学者リット（Theodor Litt）の二つの論文、すなわち「私たち自身、今の時代をどのように理解するか？」あるいは「原子力と倫理—原子力の政治的、経済的、倫理的諸問題」を手がかりにしながら、次のように主張する。「核エネルギー」問題の解決は、経済的問題だけ、政治的問題だけではなく、位相の異なる次元、すなわち倫理的問題として解決されるべきである。教育学は、人類に対する「責任」の問題としてこの問題を捉える必要がある、と。具体的には、世代をかけた重い「責任」として「3.11」は理解されるべきというわけである[小笠原 2012:87]。小笠原は、教育行為と原子力の管理・運用の間に、世代をこえた「責任」という共通項を見出し、教育学の思考や思想が、今回の惨事へ応答する必要性を説くのである。

これらの先行研究を参照するならば、教育学研究として求めるべきは単に生じた事実を



踏まえた処方箋の探究—たとえば防災教育や安全教育として、津波からの避難方法を学ぶこと等—だけではない。事実がいかに伝達され、それが社会や子どもへいかなるメリット（デメリット）をもたらしたのかを明らかにする必要がある。敷衍すれば、久富のいう第一の探究、すなわち園や学校は子どもをどう守ったか（守れなかったか）、その確実な記録を作成することが不可欠と言えよう。

とりわけ、「3.11」それ自体だけでなく、「3.11 後」の記録も検証される必要があるのではなかろうか。なぜなら、むしろ「3.11 後」の膨大な記録こそ、私たちの「3.11」を構築していると考えられるからである。小笠原の言う「責任」は、この「3.11 後」の膨大な記録・表象による「3.11」の検証にも見出すことができるにちがいない。

ここで注目すべきは、メディア研究である。この領域で、東日本大震災の報道は詳細に検証されている。たとえば一方で、遠藤薫は新聞、テレビ、ソーシャルネットワーク（ツイッター、フェイスブックなど）が東日本大震災をいかに伝えたのかを描きだした。その中で課題として見えてきたのは、在京キー局（NHK、日本テレビ、テレビ朝日、TBS、テレビ東京、フジテレビ）を中心としたテレビ報道の無力さであった。首都圏の緊急度や緊急の課題と被災地のそれとは明らかに乖離していた。にもかかわらず、キー局を中心になされたテレビ報道は、首都圏の緊急度を優先し、被災の実態を伝えることができていない[遠藤 2012:49]。

他方で伊藤守は、各テレビ局が福島原子力発電所で生じたことをいかに報じたのかを検証している。そしてここでも実証されるのはテレビ報道の無力さである。「TBS は系列局から被災地へ半年間で延べ1000人の記者を、テレビ朝日は震災発生直後の3日間は約160人余りの記者を、地震から1週間では230人余りの記者を、フジテレビも地震から1週間

は140人の記者を派遣し、取材活動にあたらせた。（中略）この大震災にかかわった記者や報道関係者は、まさに不眠不休で被災地の状況を伝えるべく奮闘した。（中略）しかし、こうした総力を結集した取材体制を布いたり、これまでにない取り組みを行ったにもかかわらず、原発事故をめぐる報道に対しては、政府の発表を追認するだけの『大本営発表』の域を出ないもの」であった[伊藤 2012:21-22]1)。

このようにメディア研究は当時の報道を反省的に検証することで、メディアの在り方を問題にする。これらは、小笠原の言う「責任」の重要な側面を担っている。

しかしながら、これらが「3.11 後」の記録の検証として不十分であることは言うまでもない。むしろ、遠藤や伊藤らのメディア研究は、その意図としてあくまで「3.11」自体の記録を問題にする。そのため、本稿が意図する「3.11 後」の記録・表象の分析とはその意図も異なっている。

ここで本稿が「3.11 後」の記録・表象に注目する意図を述べておく。本稿は、「3.11 後」の記録・表象が「3.11」を構築しているのではないかと考えている。このように考えるのは、本稿がとりわけ「子ども」の記録・表象に注目するからである。

確かに、「3.11 後」の報道を検証するまでもなく、「3.11」「3.11 後」いずれの報道においても「子ども」に関する記事は数多く確認できる。たとえば、一方で「津波がきたとき、子どもはどのように行動したのか」。「津波は子どもの心にいかなる影響を与えているのか」。「放射能は子どもの身体にいかなる悪影響をもたらすのか」。いわば「弱者としての子ども」という言説である。他方で、「押し寄せる津波の中で子どもがいかに生きたのか」。「避難生活の中で子どもはいかに生きているのか」。「復興に向けて子どもたちはいかに活動しているのか」。つまり「希望としての子ども」という言説である。



本稿は、このようなステレオタイプ化された子どもの言説がいかにか構築されたのかを明らかにする。とりわけ、「3.11」以降1週間の報道に着目し、その報道を分析する。そのことを通して、「3.11」が子どもの言説によっていかにか単純化されたのかを解明することができるだろう。

結論を先取りすれば、メディアが子どもを「明るさ」や「希望」として表象することで、メディアは「3.11」を単純化することができたのである。あえて言えば、「3.11」の複雑性は看過され、「3.11」の単純化のために「子ども」は利用されたのである。「3.11」から2年が経つ今だからこそ、「3.11後」による「3.11」の構築を明らかにする必要がある。

## 1. 研究方法

テレビニュースを検証するには原則録画が必要である。たとえネット上にアップロードされたとしても、その映像は閲覧時間やリソースも制限されている。さらに民放各局のテレビニュースは単にニュースの内容だけではなく、CMも含めた一連の流れを踏まえて検証すべきことは言うまでもない[Williams 1990:86ff]。そのように考えると、現時点でテレビニュースを検証するのはその再現可能性から判断して限界があると言わざるを得ない。次に、ネットニュースについてである。ネットニュースは、一定時間で削除、簡素化されるケースが多く、一定の時期にどのようにネット上で情報提供されたのかを検証するのは難しい。

以上を踏まえるならば、新聞報道はもっとも適した分析資料といえよう。その理由は以下の通りである。

第一に、検証・再現可能性である。縮刷版等を利用すれば日付ごとに発行時の記事を観覧することが可能であり、検証・再現可能性

は極めて高いといえる。

第二に、マスメディア内での位置づけである。現在でも新聞は他のメディアへ大きな影響を与えている。新聞記事がテレビ番組の一部となるケースも多い。さらにわが国のテレビ局は基本的に新聞社の傘下・系列にあり、情報発信の面でも新聞報道は影響力をもっている。確かにネットニュースはテレビニュースに比べて、新聞報道の影響は少ない。しかし、そのリンク先を見れば明らかなように、YAHOO!等のニュースの多くが新聞記事を情報源とする場合が多い。つまり新聞報道は、あらゆるニュースの中核に位置づけることができる。

中でも、本稿は全国紙（朝日新聞）、地方紙（河北新報）を分析する。これら二紙は読売新聞、産経新聞のように原発推進を明言していない。2012年6月9日大飯原発の再稼働の際も、「脱原発依存」という曖昧な言葉を用いている。この曖昧さは、東京新聞が「確証なき安全宣言」と見出しを付け、批判的なスタンスを貫徹していることと比べると明らかである。なぜこれらのメディアは曖昧なスタンスをとるのだろうか。まずは新聞と原子力政策の歴史的文脈をおさえることから始めよう。

## 2. 新聞社と原子力

日本の原子力政策やその浸透にメディアが重要な役割を果たしたことは周知の事実である。中でも、読売新聞の社主である正力松太郎はその中心に存在した。たとえば、1955年11月1日から12月12日まで日比谷公園で原子力平和利用博覧会が開催された。このイベントは、その後名古屋、京都、大阪、広島、福岡、札幌、仙台、水戸、岡山、高岡をめぐって開催され、のべ260万人が来場したとされる[吉見 2012:128]。

その一部を上げれば、名古屋は中日新聞、



京都と大阪は朝日新聞、広島は中国新聞、福岡は西日本新聞、仙台は河北新報がその主催団体となっている。新聞社は原子力の「平和利用」の主体であった。広島の原爆問題を唱え続けてきた中国新聞も、被爆から10年後には原子力の平和利用を唱えていたのである。東京の原子力平和利用博覧会の冒頭で正力は次のように力説している〔読売夕1955:11.1〕2)。

ひとたびわれわれの前にその秘密のトビラを開いた原子力は、もはや戦争の祭壇に奉仕するものではなく、人類永遠の平和と繁栄への道を切りひらく、今世紀最大の担い手となったのであります。わが国においても、原子力にたいする国民の認識はここ一年足らずの間に、見違えるばかりの進歩を見せ、過去の禍を転じて福となすの意気込みみなぎるものがあります。しかも日に進む世界の情勢に立ち遅れないために、いまや政府、経済界、学界等は打って一丸となり、原子力の開発の地歩を着々と固めつつあることは、まことに慶賀に堪えない所であります。

正力は、1955年に鳩山内閣で原子力担当大臣に任命されている。戦後わが国の原子力政策推進した代表的人物である。しかしながら、正力が原子力の「平和利用」を扇動し、彼を中心としたメディアがイデオロギーを流布させたと考えるのは単純すぎるだろう。というのも、同時期においては数多くの正力と類似した見解を確認できるからである。

たとえば、のちの総理大臣になる中曽根康弘は『中国新聞』の取材に次のように応えている。

「広島の人世界に向かってもっとも原子力の平和利用を叫ぶ権利がある。われわれはこの業火を新しい文明の火に転換することを広島の人たちの前に誓わねばならない」〔中国夕

1956:5.15〕。

教育学者で『原爆の子』の著者である広島大学の長田新は次のように述べている。

「原子エネルギーは、一方では人類を破滅に導くほどの恐るべき破壊力を有ってはいるが、一度それを平和産業に応用すれば、運河を穿ち、山を崩し、忽ちにして荒野を沃土に代え、更に原動力とすれば驚くべき力を発揮し得るということを吾々は聞いている」〔長田1951:34〕。

たとえ二人が時代を代表する人物であったとしても、言葉の一部を引いて時代を代表する言説と看做すことはできないだろう。とりわけ、中曽根が政治家として被爆地の『中国新聞』というメディアに込めていることは十分に考慮する必要がある。なぜなら、メディア教育学者の言うように「テレビ、新聞、映画、ラジオ、広告、雑誌は作られる」〔Masterman 1989:22=2010:30〕。だからこそ、「メディアはいかにして、また誰の利害において作用し、どのように組織され、どのように意味を生産し、どのように『リアリティー』を表象し、それらの表象がどのように理解され受容されるのか」を問う必要がある〔Masterman 1989:61=2010:80〕。

しかしながら、同時にメディアが時勢や世論にナイーブに反応し、それとかけ離れたことを決して唱えないことも認識する必要がある。1954年に読売新聞は、次のように述べている。

「10キロのウラン235はたぶん石炭にして3万4000トン。ガスに換算すると、人口300万人、現在の大阪市と名古屋市を合わせたぐらいの都市の住民が毎日飯をたき、フロをわかし、そして一カ月間は楽々と生活できるエネルギーを持っているのである。たっ



たレンガ半分ぐらいの大きさのものがそれなのである」[読売 1954.2.4]。

山本昭宏が言うように、「原子力の夢」は、これらを通して膨らんだのである[山本 2012 :298-300]。たとえば、アニメ『鉄腕アトム』の駆動エネルギーは、原子力(アトム)であったのはその例証だろう。中曽根にしろ、長田にしろ、立場をこえて「原子力の夢」、つまり資源のない日本こそが原子力を「平和利用するべき」という共通の基盤を有していたと言えよう。そしてそれは当時の風潮であり、メディアはそれを映し出している。このことを考えるならば、その報道から「震災後」の時勢を読み解くことは可能である。さらに言えば、「3.11 後」が「3.11」を構築する様相は、メディアの報道の中にあるにちがいない。

### 3. 言説分析：「3.11 後」の「3.11」

#### (1) 出産

3月13日、河北新報は仙台市青葉区の東北公済病院で「4つの新しい命が誕生した」という記事を掲載している。「希望の産声 病棟に響く」という見出しと共に、産まれた子どもを抱く母親の姿を載せている。

ここでは、妊婦らが震災という未曾有の事態をいかに乗り越え、「子ども」が誕生したのかを紹介している。たとえば、ある女性は、自宅に3歳の長女といるときに地震に見舞われた。そして長女の手を引き、小学校へ避難しているときに陣痛が始まった。そしてなんとか病院にたどり着くが、病院はエレベーターが使えず、階段で7階まで上がり、懐中電灯の光に照らされながら出産した[河北 2011:3.13]。

さらに、同様の記事は朝日新聞にも確認することができる。14日付には、余震が断続的に続く中で、岩手県宮古町で12日に誕生した子どものエピソードと子どもを抱く母親の

写真を掲載している。この女性は、出産のために東京から里帰りしていた。出産前にカラオケで好きな曲を歌いたいと一曲目を歌おうとしたその時、震災に見舞われた。その後、難を逃れ、高台にある実家へ避難した。そして中学校、病院へと避難した。ここでは、出産した経緯と助産師や医者への感謝が紹介されている[朝日 2011:3.14]。

#### (2) 放射線と子ども

河北新報が原発事故の文脈で「子ども」を取り上げたのは3月16日である。福島第一原発の「放射能漏れ」をうけて福島県内の放射線量検査を伝えている。とりわけ、福島第一原発から半径20~30キロの住民らへの屋内退避と合わせ、約50キロ離れた二本松市にも検査場が臨時に設けられたことを伝えている。

ここには、ピンクの服を着た「赤ちゃん」がマスクを着用した老人に抱かれ、放射線量を測定する器具を当てられている写真も掲載されている[河北 2011:3.16]。

朝日新聞は、主に放射線と被爆の可能性を示唆するために、「子ども」の写真を掲載している。3月12日付では、福島県大熊町で町外への避難指示を受け、毛布を抱え避難所を後にする小学生を掲載している[朝日 2011:3.12]。

翌13日には福島県川俣町へ避難してきた40歳未満全員が甲状腺がんを防ぐヨウ化カリウムを服用している事実を掲載している。その際、小学校低学年くらいの女の子が友達に囲まれた中でヨウ化カリウムの入った飲み物を一気に飲んでいいる写真が掲載されている[朝日 2011:3.13]。同日には「何が起きているのか」という大きな見出しと共に、子ども2人と携帯用ラジオに耳を傾ける父親らしき人物の写真を掲載されている。

15日には、福島県二本松市で除染後に母親に抱かれ放射線量測定器を当てられている



「赤ちゃん」の写真を載せている。キャプションとして「一家は原発の避難指示エリア外に移動していたが、両親の数値が高く1歳の男の子も一緒に除染を受けていた」と付け、事態の深刻さを伝えている[朝日 2011:3.15]。

### (3) 「希望」としての子ども

河北新報は、17日付で「けなげに救いの笑顔」と見出しを付け、次のような別枠の文章を載せている[河北 2011:3.17]。

「避難所生活の中に救いがあるとしたら、それはきっと、子どもたちの瞳の中にある。あどけない笑顔に、震災前の暮らしを必ず取り戻してみせると誓わずにはいられない。未曾有の震災に、小さな心はどれほどおびえたことだろう。それなのに…。今はじっと耐えている。けなげに、しなやかに、たくましく。悪夢をすべて受け入れている。」

この記事では4つのエピソードが紹介されている[河北 2011:3.17]。第一は、気仙沼中学1年生13歳の少女である。彼女は、神奈川県の子供を保護するために、気仙沼から離れることになる。先輩に愛の告白をできなかったこと、親友との別れが紹介され、「さよなら」とは言わないと彼女の強さを伝えている。

第二に、石巻の女子高に避難する生後1か月の赤ちゃん（四女）を抱える母親のコメントが掲載されている。哺乳瓶やミルクを持って逃げる余裕はなく、食べ物がなくて母乳もでにくくなった。場所を移動したため、食料はあるが着替えはない。衛生面の不安は尽きない。さらに、泣き出せば、疲れている避難者に迷惑をかけてしまう。「暖かい所に行きたい」と母親はコメントしている。

第三は、南三陸町の戸倉小学校の2年生の女の子である。震災の10日前に完成をむかえた体育館で2回しか遊べなかったと嘆く。

大好きな校長先生と早く縄跳びがしたいと希望をのぞかせる。しかしながら、その時体育館は津波で骨組みだけになってしまっている。

第四に、仙台市宮城野区の中学生女子は、避難所で共に暮らす近所の子どもたちを「妹」と「弟」と呼び、「妹」「弟」が増えて、きょうだいが5人になったと話す。ここでは、六角形の鉛筆をサイコロ代わりに双六を楽しんでいるとその健気さを紹介する。

朝日新聞は、避難者たちの「低体温症」への危惧を伝える記事の中で、岩手県大船渡市で親子4人（母親、女の子・男の子（小学生または幼稚園児）、赤ちゃん）が小学校で朝を迎えた記事を掲載した。そして体育館に卒業式を祝う飾りが残っていることを伝えている[朝日 2011:3.15]。

次に、16日付では宮城県栗原市の中学校での卒業式を記事にしている。「卒業式『前を向いて』』という見出しを付け、男女の生徒が笑顔で記念写真を撮影する姿の写真が掲載されている[朝日 2011:3.16]。

さらに、同日紙面1枚使用し4枚の子どもの写真を掲載している。ランドセルを背負った男の子と女の子が線路に座り遠くを見つめている写真、子どもが避難先の仙台空港でゲームをする姿などが載せられている。「小さなその手は」という大きな見出しは、震災という悲劇の中でたくましく生きる子どもを伝えるだけではない。それは、震災という「強大なもの」と子どもという「弱小なもの」との対照関係を作り出す。そして、後者は「希望」として表象されるのである。

## 4. 考察：「子ども」による「震災」の単純化

前節で本稿が示した観点は三つである。第一に、「出産」である。「3.11」の直後に生まれた子どもは、メディアによって構築されたものである。ここで構築された「子ども」は「3.11」という悲劇とコントラストをなして



いる。

たとえ同じ日に誕生したとしても、全国で誕生している「子ども」と仙台市や岩手県宮古町で誕生した「子ども」はメディア的に異なった存在である。仙台市や岩手県宮古町で誕生した「子ども」は、悲劇と対をなす「希望」としての子どもなのである。

このことは、本稿の第三の観点、すなわち「希望」としての子どもが、震災後一週間前後で頻出するようになることから明らかである。先述したように、河北新報が「避難所生活の中に救いがあるとしたら、それはきっと、子どもたちの瞳のなかにある」と述べているのはその典型だろう。

また朝日新聞の報道も同じである。中学校の卒業式を伝える記事の中で「前を向いて」と生徒らの様子を述べ、ランドセルを背負った子ども二人が遠くを見つめる写真は「未来」や「希望」の隠喩として捉えることができる。

本稿が示した第二の観点、つまり「放射能と子ども」は、「子ども＝希望」という子ども観ゆえに生じたものだろう。たとえば、福島第一原発から50キロ離れた場所でも放射線量の検査場が設けられたことを伝える際、なぜピンクの服を着た「赤ちゃん」が測定している写真を掲載する必要があったのか。さらに朝日新聞は、40歳未満全員がヨウ化カリウムを服用する事実を伝えている。その際、なぜ小学校低学年の女の子がまるで牛乳を飲むかのような写真を掲載したのだろうか。

これらはいずれも、「希望」である子どもと「放射能」とのコントラストを描き出している。たとえば、ヨウ化カリウムの記事に関しては次のように解釈できなくもない。ヨウ化カリウムを飲まなくてはいけないほど深刻な事態にもかかわらず、子どもは、無邪気にまるで牛乳でも飲むように、ヨウ化カリウムを飲む。

このように悲劇と「希望」としての子どもは、コントラスト—誤解を恐れず言えば、「震

災＝影」「子ども＝光」として一をなして構築されるのである。見方を変えれば、両者の関係は相互に依存しあったものなのである。

以上を踏まえるならば、次のことが言えるだろう。第一に、メディアの子ども観が明らかになる。具体的には、子どもはあどけなく[河北2011:3.17]、苦境の中でも「前を向く」存在なのである[朝日2011:3.16]。あえて言えば、「近代的な子ども観」と言えよう。子どもは、「希望」であり、「保護」されるべき存在なのである。

第二に、そのような子ども観を反映して、「3.11」とのコントラストとして「希望」としての子どもが構築されている。ここには、一方に「震災＝影」を、他方に「子ども＝光」を配置し、二項対立で震災を報じる報道の構造を見出すことができる。このような報道は、少年事件、いじめ自殺、体罰問題に関する報道まで一貫して見出すことができる3)。

しかしながら、私たちはこのような報道によって「光」にも「影」にもならず「排除されたもの」を看過することはできない。具体的に言えば、メディアが子どもを「明るさ」や「希望」として表象することは、「3.11 それ自体」の複雑性を看過してしまう危険があるのである。

「3.11」以降の報道に限定しても、このことは明示できる。たとえば、ヨウ化カリウムを飲用したのは40歳未満の人たちである。しかしながら、メディアがひとたび幼い子どもを写真で取り上げ、その無邪気さとコントラストを付けて報じることは、事態を単純化してしまう。なぜなら、大人がこれらを服用することは、子どもたちとは異なった意味で悲劇的だからである。「子ども」へ焦点化した報道は、このような複雑な文脈や事情を看過している。

さらに言えば、確かに未曾有の悲劇の中で「子ども」の存在は「希望」であったはずである。しかしながら、河北新報が3月17日



に母親のコメントとして報じた幼児を取り巻く衛生面の問題は、より早く正確に伝えられるべき事項ではなかろうか。保育の観点から一義的に担保されるべき問題が、「希望としての子ども」という「光」、そして震災という「影」のいずれにも含まれず、「宙吊り」の状態になったのではなかろうか。

## おわりに

本稿は、「3.11 後」の二項対立の報道、すなわち「震災＝影」「子ども＝光」によって、「3.11」が単純化されて構築されたことを解明した。

メディアは、一方に「子ども」(光)を、他方に「震災」(影)を設定する。このような二項対立の設定を通して、「3.11」の根幹に潜む複雑な要因やその要因の重なり合いは不問に付されてしまうのである。「光」にも「影」にも該当しない多くの複雑な問題は、「宙吊り」にされたままなのである。

もちろん、このような「光」と「影」のコントラストが機能したのは、多くの人がメディアと同様の子ども観を共有していたからであろう。しかしながら、「3.11 後」の報道によって、「保護すべき対象としての子ども」が画一的に「希望としての子ども」へと転用されてしまった。そしてその結果、逆に子どもを「保護すること」ができなかった。たとえば、保育をめぐる衛生面の確保などはその典型的事例と言えよう。メディアが、「3.11」においてこのような一元的な転用を行った構造を解明した点に本稿の意義がある。

最後に今後の課題を述べる。実を言えば、本稿が出した結論は、意外なものである。なぜなら、筆者が当初見通していた結論は次のようなものであった。いじめ自殺や体罰問題の報道に典型的に示されるように、メディアは「子ども」に対置される存在、すなわち「敵」を設定し、それを断罪しているだろう、と。

「3.11」のケースで言えば、「子ども」と敵対的に対置されるのは政府や東京電力ではないか。そのように考えていた。

しかしながら、メディアは政府や東京電力に厳しい批判を浴びせながらも、そのスタンスは「曖昧なもの」であった。たとえば、山田が厳しく追求するように[山田 2011:29]、朝日新聞や河北新報が政府の言葉を踏襲して使用する「脱原発依存」とは果して何を意味するのだろうか。「脱」するべきは、「原発」ではなく、「原発依存」であるということは、「原発」は残ることなのだろうか。さらに言えば、「最終的な処理方法が皆目見当がつかない汚染土の移動を『除染』と呼び、通常からすれば、明らかに異常な濃度の放射能の汚染水を『低濃度』とする」[山田 2011:57-58]など、まさに「大本営発表」を繰り返したと言えよう。

確かに、「教育問題」の報道に確認できるように、二項対立の報道は、複雑な問題を覆い隠す。事実、いじめ自殺や体罰問題も、メディアがいくら教師や教育委員会を断罪しても、問題は何も解決していない。しかしながら、今回の「3.11」の報道から明らかになるのは、メディアは、教師や教育委員会を批判するように、政府や東京電力を批判していないことである。なぜ批判しなかったのか。この点に関しては他日に期すこととしたい。

## <注>

- 1) 伊藤は述べていないが、NHKは震災発生から3日間で1500人規模の取材体制をとっていた[山田 2013:66]。
- 2) 新聞記事の引用は社名、夕刊からの引用のみ「夕」と記し、その後日付を記す。そのため、[読売夕 1955 :11.1]とは、1955年11月1日の読売新聞夕刊からの引用ということになる。
- 3) たとえば、以下を参照[時津 2008]。





### <参考文献>

- Masterman,L. (1989) *Teaching the Media*, Routledge. = (宮崎寿子訳) (2010) 『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社。
- Williams,R.1990.*Television.:Technology and Cultural Form*, Weseleyan University Press.
- 伊藤守 (2012) 『テレビは原発事故をどう伝えたのか』平凡社。
- 遠藤薫 (2012) 『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか—報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』東京電機大学出版局。
- 長田新 (1951) 『原爆の子—広島の子少年少女のうたったえ』岩波書店。
- 小笠原道雄 (2012) 「Th.リットの二つの『時局論文』(一九五七年)に関する解題」Th.リット(小笠原道雄編, 木内陽一他訳)『原子力と倫理—原子力時代の自己理解』東信堂, 79-95。
- 時津啓 (2008) 「報道と『教育問題』—「少年事件報道」と「いじめ自殺道」の分析を通して」小笠原道雄他編『教育学概論』福村出版 145-157。
- 久富善之 (2012) 「日本教育学会・特別課題研究「大震災と教育」：その研究テーマ趣旨, 経過, 目標 (特集 災害と教育/教育学)」『教育学研究』79 (4) , 380-383。
- 山住勝弘 (2012) 「語りえぬ記憶と復興への学習：ふたつの大震災の間で (特集 災害と教育/教育学)」『教育学研究』79 (4) , 367-379。
- 山本昭宏 (2012) 『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960—「被爆の記録」と「原子力の夢」』人文書院。
- 吉見俊哉 (2012) 『夢の原子力—Atoms for Dream』筑摩書房。
- 山田健太 (2013) 『3.11 とメディア』トランスビュー。